

新山ひろし

これは金のトリ、アンテナ?何かをチャッチしようとしているんだ



「突き破れ!」と 岡本太郎は叫んだ



お腹に胎児を育てる!これも未来へのコンスピラシー!(策略)

吹田市には岡本太郎の屋外作品が三つある。万博公園の「太陽の塔」は、誰でも知っている。しかし、あと二つは案外知られていない。聞けば、その二つは江坂の豊津公園付近にあるという。じゃあ、みんな見てみよう。ということで、今回は、「吹田・岡本太郎を巡る旅」。さて、どんな出会いが待っているのだろうか。

■「太陽の塔」は、胎児を育てている?

まず、万博公園に行こう。万博公園は、豊かな緑に包まれてきている。その緑の中に、ドカーンと「太陽の塔」が建っている。高さ65メートル、やっぱりでかい。鳥のような



ボクも未来へのツバサを広げた

キンキラの顔、これは未来を感じ取るアンテナだろうか...そして、おなか部分にも顔がある。僕には、おなかの中の胎児に見える。かわいくもあり、怖くもある。一体、この「太陽の塔」は、何を表現しようとしているのだろうか...

ここで、1970年の万博、「太陽の塔」誕生の頃を振り返ってみよう。「70年万博」のテーマは「進歩と調和」だった。当時は、技術優先の時代、技術が未来を切り開くと信じられていた。しかし、「進歩と調和」の「進歩」ばかりが前に出て、「調和」の自身がスカスカだった。「調和の内実を作らなければいけない。でない」と、万博は庶民から見捨てられる!と、主催者側が感じ始めた。

ていた。そこで、当時の新井真一事務総長は「お祭り広場」のプロデューサーとして、人気絶頂の岡本太郎を抜擢した。「芸術は爆発だ!」と語る、岡本太郎なら、「調和の内実を造ること」ができる、新井はそう考えた。岡本太郎は悩んだが、意を決めて「太陽の塔」のプランを提出した。丹下健三の建築の天井を胎児のような顔が突き破っている!これは、岡本の挑戦だった。このプランを見て、すべての関係者は度肝を抜かれた。「陳腐なコケシ」と怒る人がいた。しかし、当時の万博協会長、石坂泰三は「これさえあれば万博は成功だ。他に何もなくていい」とまで、語った。この一言で「太陽の塔」計画は、劇的に実行に移されていったのである。

やがて、「お祭り広場」の天井がぶち抜かれ、キンキラな鳥のような顔が現れた。岡本太郎は「人類は進歩なんかしていない。何が進歩だ。

■「リオちゃん」誕生の物語

次は、江坂の豊津公園へ行こう。公園の東側に「リオちゃん」と呼ばれる岡本太郎の作品があった。ガラガラとする太陽のような顔。大きな目玉。その真ん中に青い稲

妻が走る!カラフルで可愛い。この「リオちゃん」は、1983年にダスキンが開店した「江坂カーニバル・プラザ」というレストランの看板であり、キャラクターだった。店は、「リオのカーニバル」をイメージした雰囲気、生演奏の中で食べる「カニ」が売っていた。リオのカーニバル...そこから「リオちゃん」という愛称が生まれた。



ボクも岡本太郎とアートを競ってみた

しかし、2007年に「カーニバル・プラザ」は閉店、「リオちゃん」は吹田市に寄贈された。それ以後、吹田市立博物館で「岡本太郎展」が行われた際に、「リオちゃん」も出展され、そのまま

■「みつめあう愛」は男と女の戦いの物語か...

このダスキン本社にも岡本太郎作品があった。ダスキンビルは二つあり、その二つをつなぐ渡り廊下に、縦8メートル、横4メートルの巨大な陶壁画がそびえ立っている。題は「みつめあう愛」、上の方に女性の目が二つ、下の方に男性の目が二つ。僕には、見つめ合うというよりは、男と女が戦っているように見える。「愛は戦いだ!」と、岡本太郎が叫んでいる...。しかし、「リオちゃん」といい「みつめあう愛」

品があった。ダスキンビルは二つあり、その二つをつなぐ渡り廊下に、縦8メートル、横4メートルの巨大な陶壁画がそびえ立っている。題は「みつめあう愛」、上の方に女性の目が二つ、下の方に男性の目が二つ。僕には、見つめ合うというよりは、男と女が戦っているように見える。「愛は戦いだ!」と、岡本太郎が叫んでいる...。しかし、「リオちゃん」といい「みつめあう愛」



巨大な陶壁画(上の写真)の題は「みつめあう愛」ということだ

■吹田を岡本太郎の町にしよう!

さて、吹田における、三つの岡本太郎作品を巡ってみた。岡本太郎の初々しいスピリットを浴びて、何だか、すごく元気になった。

ところで、ダスキンという会社の社名は、「ダスト・クロス」と「ぞうきん」の合成語であるが、もう一つ、異説がある。ドイツ語の「ダス・キント」、これは「こどもっぽいこと」を意味する。今回の岡本



「リオちゃん」は豊津公園にいた

太郎を巡ってみて、僕が感じているのは、この「こどもっぽい」という精神の初々しさだ。「ダス・キント!...いくつになってもこどもであれ」、これが「突き破れ!」という岡本の叫びにつながる。吹田の町に散りばめられた、かけがえない岡本太郎の屋外作品。吹田と岡本太郎、この縁をもっと活かすことができなにか...。例えば、吹田の町に、岡本太郎のミニユメントを集めて、町そのものを「岡本太郎博物館」にする。そうすれば、きつときつと、世界中から、アートのファンが吹田に馳せ参ずることだろう。

■参考資料

- 岡本太郎・太陽の塔と最後の戦い 平野暁臣著 PHP新書
- 「太陽の塔」森見登見彦 新潮文庫
- 「民博早わかり」梅棹忠夫 千里文化財団発行
- 太陽の塔をテーマとする多くのホームページ
- (株)ダスキンのホームページ
- 太陽の塔・吹田市千里万博公園10
- みつめあう愛・吹田市豊津町1 33
- （ダスキン本社ビル）
- リオちゃん・吹田市豊津町7
- （豊津公園内）